

主の公現の祭日の説教

松本 巖 神父 2011年1月2日(日)

《本日は太田教会出身の松本 巖神父様によるお話です》

今日、私たちはクリスマスの喜びのうちに新年を迎え、そして主の公現の祝日を祝っています。私が小学生だった時、学校の友達を家に呼んだのですが、クリスマス前でしたから小さな馬小屋の飾りが玄関の所にありました。それを見た友達は「何これ？ 何これ？」と尋ねたので、私は「クリスマスの馬小屋の飾りで、クリスマスはイエス様が生まれた日だから」と答えると、その友達は「イエスってラッキーなやつだよな！ クリスマスの日に生まれたなんて！」そう言っていました。私は呆気にとられていました。(笑い)

私は今、幼稚園の園長をしていますが、今年クリスマスの馬小屋の飾りを玄関に設える時、毎年使っている籐で編んだ“飼い葉桶”が見つかりませんでした。そこで、仕方なしに私は板を釘で打って箱を作り、それを飼い葉桶にしてイエス様をそこに寝かせまじょうと、私の作った小さな木箱の中に幼子イエス様を入れたところ、棺おけの様な格好になってしまったのです。

その時、私はとても悲しかった出来事を思い出しました。4年位前の2月4日、寒い日の朝、若い友人夫婦のご主人が電話をかけて来て、「神父様、実は私の妻が今、妊娠9ヵ月ですが、昨夜、妻のおなかの中でその赤ちゃんが亡くなってしまった。心臓が停止してしまいました。妻はカトリックで、私はカトリックではないのだけれど、この様な時、教会ではどうするの？」と言いました。私はびっくりしてしまって、何処にいるのか尋ねると、広尾の愛育病院という事でしたので、タクシーに乗って私はお祈りに行きました。生まれて初めて分娩室に入れてもらいました。そして、分娩台に横たわっている彼女に「教会の松本神父だけれど、お祈りに来ましたよ」と言葉をかけました。

「赤ちゃんがおなかの中で死んでしまっているの」。彼女のその悲しい声を聞いた時、私は本当に悲しくて、つらくて、そこでボロボロ泣いてしまっていたのです。お祈りに、また励ましに来た神父に泣かれて、本当にどうしたらよいか分からず、後ろにいた彼女のお母さんが「神父様、涙を拭いて下さい」と言ってティッシュをくれたのですが、何と言って慰めてよいのか、何と言って励ましたらよいのかわかりませんでした。そして、私の口から出た言葉は、

「あなたは今、神様にお祈りする気持ちになれないでしょう？」「なれません。」「マリア様にお祈りする気持ちになれないでしょう？」「なれません。」「でも、あなたはこれから24時間かけて赤ちゃんを出産するのだけれど、それに一人で耐えられる？」「絶えられません。」

「だったら、赤ちゃんに祈りなさい。赤ちゃんにママを助けてとずっと祈り続けなさい。9ヶ月の間、あなたに喜びと幸せを与えてくれた赤ちゃんが、神父である私にも分からない形であなたを支えようとしている。あなたを励まそうとしているに違いない。だから赤ちゃんに頼みなさい。」

そうやって、ご聖体を授けて帰りました。次の日の朝、そのご主人から電話がかかって来て

「神父様、葬儀に病院まで来て欲しい。赤ちゃんがお母さんを守ってくれた。葬儀の時、洗礼を授けてくれたらいいな。名前はクララがいいかな。」

その病院の霊安室で、私は葬儀と洗礼式を執り行いました。本当に小さな棺を見た時に、悲しくて涙が止まりませんでした。クララという名前を授けて式が終わりました。

私はその時の事を、自分がクリスマスで設えた飼葉桶を見た時に鮮明に思い出してしまいました。それから、その夫婦が回復するには暫らく時間がかかりました。しかし、何ヶ月か経って、家に呼ばれた時に彼が「神父様のあの言葉に助けられた。僕は神なんか信じないバリバリのジャーナリストで、戦場とかそういった所を回っていた。でも今回は全然違った。人の命に関する感覚が全然違った。そしてあの時、神父様が言ったよね。赤ちゃんに祈れって。でも死んだ赤ちゃんは、合理的に考えたら母体を苦しめるだけしか出来ない。だけれども確かに赤ちゃんは母や私を守ろうとしている、支えようとしているに違いない、そうあるべきだと思った。これって永遠の命って事なのかな。・・・他の父親、母親が一生かけても分からない事をあの一日でクララから教えてもらった。生きるってどういう事、愛するってどういう事、支え合うってどういう事、信じるってどういう事、永遠の命ってどういう事はどういう事か、クララから教えてもらった。」

その春に彼は洗礼を受けました。娘とおして“永遠の命”というのはどういうものなのか分かったという事でした。その絆のうちに生かされているという事、死をもって絆が断ち切られないという事でしょう。

クリスマスで飼葉桶に寝かされている幼子が、あなた方に“しるし”だと言われました。飼葉桶というのは、ある意味で“棺おけ”なのかも知れないないなとその時に私は思いました。マルコの教会が福音書を編集しました。イエス様が亡くなられてから40年位経った後でしょう。マルコの共同体は“イエスの十字架の死”とはどういう意味があったのだろうか、その事を味わいたくて、あの福音書を編集したようなものです。イエスは最後のところで、十字架上で絶叫します。『私の神、私の神、どうして私をお見捨てになったのですか』。それを見た異邦人のローマの百人隊長が言いました。「この方こそ、神のひとり子であった」と。マルコの教会はその様な信仰を生きていたのでしょうか。世の中が、「あのイエスというのは、十字架で殺された犯罪人だ。何の力もない、世の中何も変わっていないじゃないか。」と言っている中で、マルコの共同体は「いや、何を言っているのだ。あの十字架上で、あそこまで叫んで命を捧げたイエスこそ、私にとっての神の子キリストである。」その事を伝えたくて、マルコはあの福音書を編集しました。だから、イエスが堂々と立派な説教をしている姿ではなく、たくさんの人を癒している奇跡の人ではなく、まさに、むごたらしい十字架上で叫んでいる姿を見た異邦人の百人隊長は、イエスが誰だか分かった、その信仰をマルコの共同体は生きていたのでしょうか。

それから、20年位経って、ルカの教会やマタイの教会はもっと味わったのでしょうか。「あのイエス様というのは、あの十字架上で命をかけて私たちに救いをもたらして下さった、神の子イエス様はど

ういう風に生まれたのだろうか？」。マルコの福音書はそこまで考えなかったのです。だからクリスマスの物語が書いてないのです。

でもその後、ルカの教会はマリアのお告げから始まり、羊飼いと飼い葉桶に寝かされている幼子イエスの物語を色々な手引書や言い伝えを用いながら物語を編集し、私たちに紹介してくれました。今日読まれたマタイはヨゼフのお告げをとおして、そして博士の訪問をとおして、イエス様がどういう風にお生まれになったかという物語を私たちに残して下さいました。2つの物語ともすごく不思議だなと思うのです。博士たちは“黄金、乳香、^{もつやく}没薬”を持って行ったのです。没薬というのは人が亡くなった時に、遺体を処理する時の防腐剤の様なものでしょう。赤ちゃんの生まれた出産祝いにそんな物を持って行くなんておかしな話ですよ。でもきっとマタイとその共同体は、“あの十字架上のイエス様、そしてそのイエス様が復活して私たちと一緒にいて下さり、私たちを永遠の命に憩わせて下さる”という信仰をもって、そのイエス様の誕生の物語を味わっていたから、「イエスがクリスマス日に生まれてラッキーだな」というのではなく、まさに復活の、永遠の命の信仰をとおしてイエス様の誕生の物語を味わおうとしていたのです。だから「イエス様が誕生してハッピー」というよりも、“イエス様があの様な死をとおして救いを開いて下さった”その死に様を誕生の姿に重ね合せて見ていたのでしょう。だから飼い葉桶はまさにお棺、柩だったと言えるでしょう。生きてあの様に亡くなったイエス様はまさに生まれた時から、母の胎から出た時から裸で、そして最後も裸で亡くなって行かれる。私たちはこの人生の中で何を築き、何を持って行くのか。おおきな地位や名声や全てのこの世の出来事が虚しくはかなく消え去り、移ろい無くなって行く。しかし、愛と、愛がかたち作ったものだけが永遠の輝きを持って残り続けて行く。“あの裸の幼子、そして裸の十字架のイエス”それはまさに私たちが何を大切に生きていくのかを示す“しるし”です。そして、あのクララちゃんのパパが本当に信じた様に、愛にかたち作られた命は永遠のものだ、という信仰を持って私たちはクリスマスを祝いました。

私は幼稚園の園長として、180人位の園児をみていますが、リーマンショックで悩んでいる園児は一人もいないのです。株価が上がったり下がったりすることを気にかけて幼稚園に来る園児も一人もいないのです。みんな未来に恋をしているようです。「将来ケーキ屋さんになるんだ」「お花屋さんになるんだ」「Jリーガーになるんだ」。ってね。

私たち人間は本性的に明るい未来に恋をしたいのでしょう。今、日本に元気が無いのは、未来に恋が出来ないのです。景気が悪いとか、失業率がすごい、右肩上がりに給料が上がって行かないとか、何としても明るい未来が見られないという事が私たちを苦しめています。私たちは明るい未来を見たいのです。今日の集会祭儀の祈りの中に「私たちは神様のみ顔を仰ぎ見る」という言葉があり、私たちはその最高の明るい未来に向かって歩み続けているのです。永遠の命の眼差しをもってこの人生の流れ、毎日の生活を見た時に、そこにある経済的な苦しさや厳しさ、あるいは病気や治る見込みの無いような絶望から生まれる重さや辛さを、もし私たちが永遠の眼差しの信仰をもって見たならば、決

して暗い絶望的な、もうだめだというものでは無くて、その中にも明るい未来、今日の一步を示していける、そういう光が与えられるでしょう、それがこのクリスマスの飼い葉桶に寝かされている幼子です。それが私たちに示された希望のしるしです。

私たちは最終的な「神様の顔を仰ぎ見る」「私たちの目からことごとく涙が拭い去られ、もはや苦しみも嘆きも無く、命を与えられたものが神の子として永遠の命を生きる」その決定的な絶対的な明るい未来に向かって歩いて行く私たち共同体でありますように、新しい1年の上に神様の恵み、聖霊の祝福を望み願いながら、この感謝の祭儀を祝ってまいりましょう。